

アジア スタイル

十七人のアジア建築家たち



Chen Ruixian

Li Zuyuan

Seung H-sang

Kim Jun-saung

Zhang Yonghe

Ma Guoxing

Xing Tonghe

Suo Lang

Rocco Yim

Kay Ngee Tan

Prapapat & Theeraphon Niyom

Vu Hoang Hac

Vasant & Ravathi Kamath

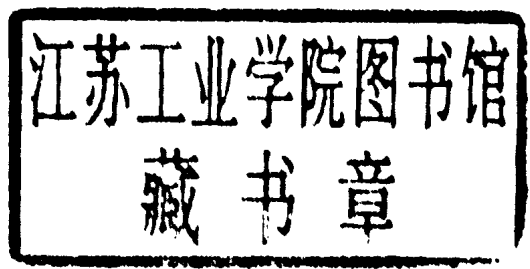
Gerard da Cunha

Bibhuti Man Singh

Kenneth Yeang

Asian Style

文——村松伸
写真——浅川敏



A s i a n S t y l e

アジア・スタイル

十七人のアジア建築家たち

文 | 村松伸十 | 写真 | 浅川敏

村松 伸

むらまつ しん 一九五四年静岡県生まれ。
七八年、東京大学建築学科卒業。
八一〜八四年、中国北京の清華大学に留学。
八七年、東京大学建築学科博士課程修了。
九二〜九三年、韓国ソウル大学建築学科客員研究員。
九六年、ハーバード大学芸術学部客員研究員。
現在、東京大学生産技術研究所助手、工学博士。
専攻はアジアを中心とした都市・建築史。
著書に『中国建築語学記』（鹿島出版会）
『上海・都市と建築』（ハルコ出版）
『新亜州建築家——同時代としてのアジア建築』（鹿島出版会）

浅川 敏

あさかわ さとし 一九五九年東京・新宿生まれ。
八〇年、東京工芸大学卒業。
写真展に七九年、『裏町』。
九四年、『学校はすべての人々の舞台だった』。
建築、インテリア、アートを中心に雑誌、広告、専門誌などで活躍中。
アジアが好き。レゲエが好き。落語が好き。
酒が好き。街が好き。自然が好き。杜が好き。太陽が好き。
どんな物でも、どんな事でも、きうきうと輝く、そんな一瞬が好き。
建築や物やアートの写真も撮る。

アジアン・スタイル——十七人のアジア建築家たち—— 目次

はじめに

村松伸

2

台北／台湾

陳瑞憲

都市という現実——フットワークの軽み——同時代としての台北

5

高雄／台湾

李祖原

「中華」の巨塔——「郷土」、そして、「中華」ロマン主義——アイデンティティという落とし穴

13

ソウル／韓国

承孝相

住まいの美学——探訪「鶴洞守拙堂」——韓国建築界の第四世代

22

ソウル／韓国

金竣成

スニーカーを履いた建築家——トルネードハウス——生活の澱を飼い馴らす

30

北京／中国

張永和

北京的新世代——中国摩登住宅——成功への足枷

38

北京／中国

馬国馨

ナシヨナリズムと建築―赤い建築家―ナシヨナル・アーキテクト

47

上海／中国

邢同和

上海、再び―輝く未来と栄光の過去―正統を継ぐ者

56

ラサ／中国

索郎

西藏迷走―最初のチベット人建築家―バナキュラーの力

65

香港

ロツコ・イム

百万ドルの超高層―「歩道」都市―香港モダニストの行く末

74

シンガポール

ケイ・ニー・タン

「ポスト大英建築帝国」の申し子―クルニー・パークの家―アジア建築への道

85

バンコク／タイ

プラパーパット・ニヨム

世紀末バンコク都市事情―喧騒の中の楽園―
実験的「タイモダン」

93

ハノイ／ヴェトナム

ヴー・ホアン・ハツク

「ラブ・ホテル」の町―理想の家―ハノイで建築家たること

103

デリー／インド

カマス夫妻

成熟のインド―第三の世代―塔の家

112

バンカロール／インド

ジエラード・ダ・クンナ

パレス、パレス、パレス！―ダンス・ワイレッジ―
インドの大地と生きる

122

カトマンドウ／ネパール

ビブティ・マン・シン

「桃源郷」の由縁―小国の悲しみ―ヒマラヤの足元にて

131

クアラルンプール／マレーシア

ケン・ヤング

「クアラルンプール・ショック」―南方からの「ものいい」―
楽観的未來が漂う都市で

141

クアラルンプール／マレーシア

ジミー・リム

都市のリゾート―ジャングル・ハウス―住むことと設計すること

151

アジア現代建築と十七人のアジア建築家たち

160

あとがき

浅川 敏

167

アジア・スタイル——十七人のアジア建築家たち

はじめに

村松伸

はくたちがアジアの現代建築に注目し、そこに生きる建築家たちに面会し始めたのにはいくつかの理由があった。

研究調査や観光でたびたび訪れるアジアの都市の活力とそこで急激に生まれ始めている建築の姿は、見るものを感動させる。ただし、それは日本で祭りの雰囲気魅了されたり、子供たちの成長に眼をみはるのと、どこか似ている。ひとは、静かなる落ちつきよりも、動きある現象に引き込まれ易いのであろう。

でも、いったん冷静になってアジア都市の活力やら建築の激変を客観的に理解しようとしても、その手だてはほとんどない。なぜ、アジアの都市が活力があるのか。建築家たちは何を目標としているのか。どんな建築家が何を作っているのかについてさえ、手に入る情報は皆無に近い。であるとすれば、自分たちの手で情報を収集し、分析するほかはない、そう考えて写真家の浅川敏さんとともに歩み出したのであった。

ここで取り上げた十七人のアジア建築家は通例の「アジア」全域に満遍なく広く分布しているわけではない。第一、「アジア」という言葉自体、どこを指しているかも明確ではないのだ。外務省のアジア局の統括する範囲は、パキスタン以東というし、アジア大会の参加国はトルコや旧ソ連から分離独立したばかりの内陸アジアまで含んでしまい、したがって十七人のみで、「アジア」というにはあまりにもおこがましい。

この中にはフィリピンの建築家もインドネシアの建築家も入っていない。パキスタンやスリランカ、バン

グラデシユなど南アジア諸国に対する態度はいささか冷淡にもみえる。さらにその西側のアラブ諸国や内陸アジアについては、その冷淡さを通り越している。そして、肝心の日本の建築家も無視されている。日本も歴としたアジアの一員である。

だが、そこにさしたる理由はない。ぼくと浅川さんがこれまで訪れることのできた国々の範囲の建築家と建築について取り上げたに過ぎない。ぼく自身、「冷淡」に見えるパキスタン、アフガニスタン、アラブ諸国やスリランカ、内陸アジア諸国は足を踏み入れたこともなく、実感なきこと述ぶるべからずとの教訓をかたくに守っただけである。

それでもぼくたちがたまたま訪れ、インタビューした十七人の建築家が所属する地域は広大無辺とも言える。だが、これまでの建築史の記述は、それがたとえ「世界建築史」と銘打たれてはいても、アジアは冷たくあしらわれている。いや、アジアだけではない。イスラム世界も、アフリカも、ラテン・アメリカの建築も「世界建築史」のなかで巨大な身体を小さくして、うずくまっているのである。

この書物は、そんな現状に対して提出したぼくたちふたりの解答のひとつである。隠れているアジアの現代建築を白日の下に晒すのにはいくつかの方法があるだろう。ぼくたちは、まず、歩きだすことにした。ぼくが建築家を探し、浅川さんに提案し、そして合意して旅にでる。建築家に会う。ぼくはインタビューし、そのあとは建物や都市をぼつとながめている。浅川さんは、多くのインタビューの間、別個に建物を自分の眼と腕で撮影をしている。ひとりの建築家のひとつの作品を、ぼくは文章で、浅川さんは写真という異なった方法で十全に表現しようとした。共著というのは、そんなふたりの共同である一方、競争の作業でもあるその結果を指して言う。

アジアの都市と建築の変化は、ぼくたちの旅のスピードよりも圧倒的にはやい。ここにあるのは一九九四年末あたりから一九九六年初頭までにぼくたちが手にした姿でしかない。その速度に遅れまいとぼくたちは、こ

れからも旅にでかけるはずだ。そして、その目標はアジアのみならず、アジアを超えて地平線のかなたの都市と建築にまで広がっている。

なお、ふたりの共同作業の第一弾のこの本の出版にあたっては、大成建設株式会社に負うところのおおいにある。社内報『たいせい』連載中（一九九五年四月号～一九九六年三月号）から広報部の増田彰久氏、田中美絵さん、ブレーン・プールの吉良久美さんにお世話になった。また、今回の単行本の完成には筑摩書房の鶴見智佳子さんの大きな励まし（？）が力となっている。最後のまとめにかかっていた時期、ボストンに滞在している多くの部屋を、遠くから始終みはっていたようだ。ここに感謝を表したい。

一九九六年九月十一日
美国、馬州劍橋にて

陳瑞憲

台北／台灣

チェン・ルイシェン



↓都市という現実

アジアは、今、変わりつつある。たとえばその変化の急激さは、一九世紀末の西欧、二〇世紀初頭のアメリカ、第二次大戦直後の日本、メキシコ、ブラジルに匹敵するかも知れない。富が集積し、それまでの価値観が日々変わっていく。都市の中に建つ建物や風景も、昨日と今日とは、見違えるほどだ。そして、都市の中間層が誕生し、経験主義の伝統的工匠と少数のエリート建築家による寡占状態から、建築界は新しい状況へと一挙に変わる。すなわち、新しい建築家の登場である。

陳瑞憲、チェン・ルイシェン。その変貌激しいアジアに誕生した新しい建築家として、台湾の彼を真先に挙げなければならない理由はいくつかある。彼の代表作、「陳揚・音楽スタジオ」を見てみよう。あらゆるものが詰め込まれた、路地の奥の奥に存在するアジア的混在の美学、そして、その中にすくと建ったこのミュー



一九五七年、台北生まれ。八〇年、淡江大学化学科卒業。
八六年、東京デザイナー学院卒業、安藤忠雄建築事務所勤務。
八八・九一年、禾力設計工程有限公司勤務。
九一年、陳瑞憲建築研究室設立。

ジシヤンのためのスタジオの奇妙な対比、これこそ、アジアの急激な変化を象徴している。

しばらく以前の台北だったら、建築家も住み手もこんな場所に新しい住宅を建てはしなかっただろう。金持ちは風光明媚な郊外に一戸建ての邸宅をかまえるか、さもなければ都市の一等地に建つ豪華マンションに広いフロアを購入する。いずれも足下の混沌たる都市の雑踏、社会の現実に向けた「理想の住まい」への逃避行為なのである。

非西洋社会のひとびとは、常にそうであった。理想を欧米に求め、「欧米の都市」自国の都市「秀麗・醜悪」という図式的思考にがんじがらめになっている。日本でさえ、都市の人間たちがやつとその呪縛から一歩抜き出たにすぎない。

だが、ここでクライアント陳揚も建築家陳瑞憲もつと素直に、自分たちの育ってきた街や生活している場所を見て、その好きを感じ取っている。無意識の経験が作り上げてきた台北という都市の容貌は、はくたちにとつても懐かしい東アジア独特の風景だ。そこに建つ陳瑞憲による建物は、形態をてらうこともない。だが、前面にガラスを配し、光を採り入れ、新しさだけは際立っている。

統一感が、西洋の町並みの特色だとしたら、不統一こそ、われわれアジアの町並みの特権だ、と初めて胸を張って言える状況になってきた。最新と保守の混合、既存の住宅の極彩色と陳瑞憲設計のスタジオの落ちつい

た錆色の取り合わせ、富と貧との共存、それがまた新しい都市の容貌を作りだす。欧米の視点から言えばちぐはぐとも見えるその状態は、今この都市台北が急激に動いていることの証左である。陳瑞憲はそれを無意識に理解し、そこで何かを起こそうとしている。

↓フットワークの軽み

都市台北の現実を、西洋都市の色眼鏡をかけないで、素直に観察し、その「不統一性」という特色を逆手にとった設計手法が、陳瑞憲をアジアの新しい建築家としてまっさきに押した第一の理由だとしたら、第二は、その身軽さである。彼の作品は、インテリアであり、ブティックであり、住宅であり、小さなオフィスである。それは決して、議事堂でも、歴史博物館でも、国家の宗教施設でも、超高層ビルでもない。

国家や民族、宗教を背負う権威主義的建築家の時代は、アジアから去りつつある。アジアは政治の時代から、開発独裁の時期に移行し、いま、台湾ではその次の時代——つまり、「中間層」の時代が現れようとしている。かつて建築家を支持してきたのは、権力を掌中にした政治家や宗教家であった。開発独裁の時期には、金をふんだんに使える政治家と独占資本家が、建築家の後ろ楯となっていた。

そこに誕生した建物のなんと大げさなこと。アジアの国々の多くがかつては植民地であった。支配者たちは支配の威容を誇示するために大仰な建物を各地に建てた。アジアの国々が独立を獲得した時、まず必要なのは「独立」を建造物で表象することであり、かつての植民者たちのデザイン手法が盗用された。やがて、「歴史」、「宗教」、「富」、「名声」と、さまざまなのが建物となって、アジアの国々に出現している。

建築家は政治家や資本家や宗教家と席を同じくして、国家や宗教や経済を談じる。そこに「国家建築家」が生まれる芽が潜む。かれらは、建物のために建物を建てるのではない。何か別のことのために建てる。日本を含めて戦後の第一世代はこの「国家建築家」を演じなければならなかった。



吹き抜けから見上げたところ(陳揚・音楽スタジオ)



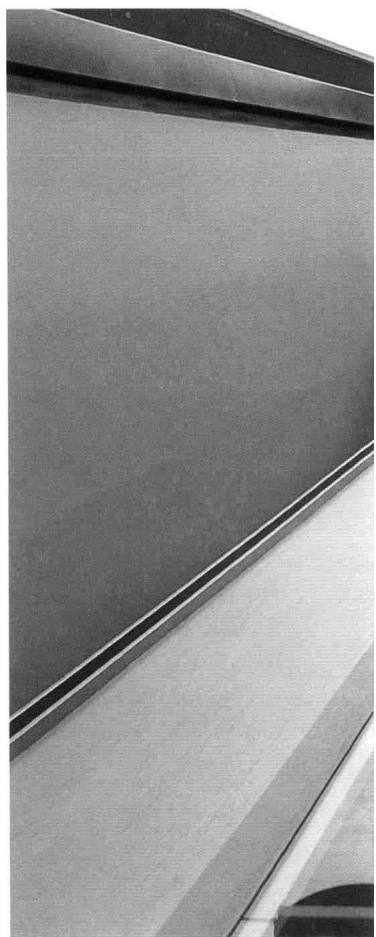
一階内部より入口方向を見る



階段の照明器具



外観



だが、陳瑞憲を支えているのは、都市の最前線で生きる同世代とのネットワークである。ここに挙げた彼の作品も、ミュージシャンのスタジオ兼住宅という点に新鮮さがある。この建物のクライアント、陳揚はコマーシャル音楽の作曲ばかりでなく、台北の音楽シーンをもリードする。同じ感覚を持ったものへの共感が、そこにはある。簡単に言うならば、かつこよさ、おしゃれ、そんなアーティストやミュージシャンやタレントや詩人やエッセイストが共有する感覚が都市へと染み出て、建築家もそれに関わり始めたのだ。

建築の社会性とか公共性、国家や民族、宗教との関係について、とやかく言うのは無粋、まあイキに、身軽に人生を楽しもう、とひとびとが余裕をもてる社会が誕生したその瞬間、陳瑞憲という新しいタイプの建築家も同時に生まれた。陳瑞憲にとって、建築を設計することは、単に設計することである。その行為に楽しみを見いだしている。ぼくたちには、普通に思えるこのスタンスは、台湾に陳瑞憲によって初めてもたらされたのである。

台湾では「建築家」であることが、特権である。国家試験を受験できる条件がまず厳しく、合格率はさらに低い。離関に挑む刻苦の時間を放棄した陳瑞憲は「建築家」でない。だれにでもなれるインテリア・デザイナーとして生きることを選んだ。台湾の建築界を背負うこともなく、まして、国家などというものは彼のなかに存在さえしていまい。だからこそ軽やかなフットワークで、新しい試みができるのであろう。

↓同時代としての台北

陳瑞憲をアジアの建築家の新しい動きとして押した三つ目の理由は、ぼくたちと共通する「同時代」感覚。見る映画、食べる料理、聞く音楽、読む本、好みの建築家、好きな場所、それらが国籍を越えて、共有される。ひとつの都市に、ひとつの国に、鎖でつながれる時代ではない。外国から数カ月遅れて届く建築雑誌のページを、眩しい気持ちでめくる時代でもない。

じゃあ、来週行くからね、と台北から e-mail が届き、乃木坂で待ち合わせて、タイ・レストランに行く。国境が、経済と交通手段、インターネットによって、取り払われた。広い世界に、ぼくたちは別々に孤立してはいない。アジアの、同じ時代に生きているとの感覚が、陳瑞憲という時、強く漂ってくる。

ここで、「小さな地球の」とはしないで、「アジアの、同じ時代に」とするのはわけがある。アジアは、とりわけ、韓国、台湾、タイは、「日本化」が進んでいる。かつて、それは文化侵略と呼ばれた時期もある。あるいは、欧米の代替品と卑下されたこともある。だが、現在、これらの国々で生じていることはどうもそうではないようだ。

欧米がアジアの植民地で建てた建物は、そのままの形で独立政権に継承された。欧米本国の優雅な邸宅建築は、アジアの上流階級へと流れていった。だが、近年のアジアの経済成長とともに生まれた多数の中産階級にとって、相應しい建物や住宅のスタイルは、そのいずれでもない。両者とも、あまりにも自分たちの意識とかけ離れているのだ。

そこでモデルとなるのが、日本の現代建築であった。だが、それはフォーマルに台湾や韓国、タイに移入しているわけではない。アジアの建築家の多くは、現在でも、かつての植民地宗主国やアメリカに留学する。台湾にとって、日本はかつての宗主国であるから、多くの留学生がやってくる。かれらは日本の著名大学に籍をおき、博士号を獲得して台湾に凱旋する。そこで生みだされるのは、建築学者であって建築家ではない。建築家になるほとんどは、したがって、アメリカに留学することとなる。

だから、「フォーマル」ではない。日本建築は、建築メディアや観光旅行や短期の滞在によってひろまっていく。陳瑞憲にしても同じだ。東京の専門学校で少々建築を学び、卒業後、これも少々、安藤忠雄の事務所にいたという。以来、日本の建築雑誌を丹念に眺め、たびたび、日本を訪れて、陳瑞憲の日本最肩が続いている。陳瑞憲が日本で求め、獲得したのは、決して建築の大理論でも、堅固な方法でもないはずだ。例えて言えば、